

樹齢 170 年を超えたヒノキ人工林の動態

～赤沼田天保林の調査報告～

中部森林管理局 森林技術・支援センター
森林技術普及専門官 安江 清文

1. 課題を取り上げた背景

赤沼田天保林は、飛騨地方が天領であった江戸時代天保年間に植栽された岐阜県最古、国内でも数少ないヒノキ人工林で、歴史的・学術的にも価値が高く、現在では、希少個体群保護林として管理（3.25ha）を行っています。平成30年度、岐阜県において相次ぐ風水害により甚大な被害が発生し、近隣の山地においても土砂崩壊や倒木があったことから、赤沼田天保林の現状把握が必要となりました。

2. 取組の経過

赤沼田天保林は、昭和37年に学術参考保護林に指定され、平成5年からは植物群落保護林、平成27年からは希少個体群保護林として管理されてきました。昭和47年から試験地を設定し一定間隔で定点観測を行うと共に、風倒木が発生した場合は樹幹解析を行うなど希少な人工林のデータを収集し情報発信を行ってきました。また、平成8年に毎木調査を実施し、平成8年度業務研究発表会にて報告されました。

平成30年度に、6月下旬から7月上旬にかけての水害や10月の台風により、近隣の山地において土砂崩壊や倒木が発生したことから、保護林の現況について詳しい調査が必要と判断し、平成8年と同様の毎木調査を実施するとともに分析を行いました。

3. 実行結果と考察

毎木調査の結果、心配された被害は無く、本数密度は286本/ha、主な樹種割合は、ヒノキ70%、サワラ13%、モミ7%でした。ヒノキについ

ては、平均樹高31m、成長率（H8～30）111%、平均胸高直径52cm、成長率115%となっていました。樹高及び胸高直径の分布について22年間の変遷を図-1、2に示しました。樹齢170年を超えたヒノキ林が現在も成長していることが読み取れます。また、形状比は62となっており良好な状況であると判断しました。

赤沼田天保林はヒノキやサワラの苗を山取にて植栽されており、その後の保育については定かではありませんが、200年近い林分は天然林の様相を呈しております。今後更に資料を収集し、長伐期施業の指標となるよう取組を進めていくこととしています。

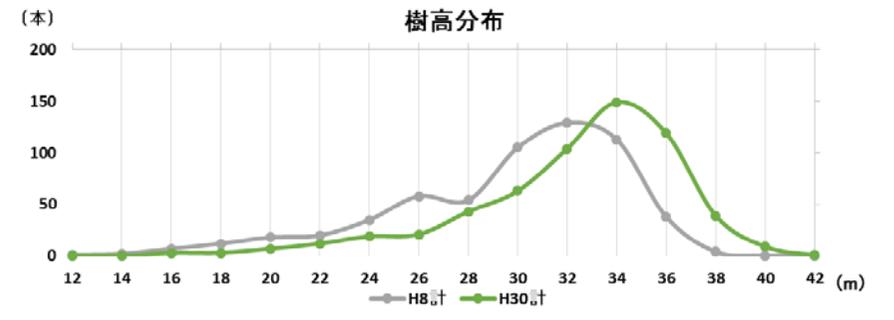


図-1 ヒノキ樹高分布

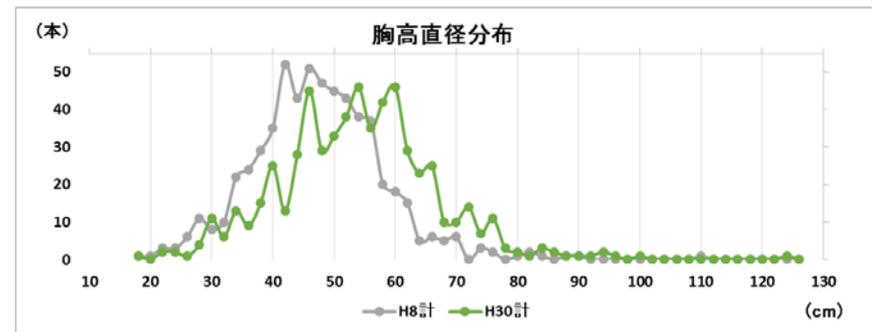


図-2 ヒノキ胸高直径分布